

傾
城
無
間
鐘

19

20

21

22

23

傾城無間鐘

作者紀海音

厚詞素問に曰く。春三月これを發陳と云ふ。天地と共に生じ萬物以て榮ふ。形をゆるやかにして志を生ぜしめよ。生じて殺す事なかれ。賞じて罰することなかれ。是れ春氣の應ずる所にして養生の道君子の道。民を養ふ源氏。御先祖足利尊氏公四海を掌握ありしより。爰に至つて百餘歳。子々相承の將軍職。頼兼公の御權勢。オロシ申すも中々。愚かなり。ユリ地朝日子勾ふ松かざり。地都ぞ春の花の御所御弓始の吉日とて。席を設けて虎の間の廣縁近く坐したまへば。管領細川勝元山梨日向前司久國。御はたあづかり弓大將仁木赤松吉良石堂。役目々々に従ひてフシ薙々蕩蕩と相ならぶ。地今川備中守俊秀三尺あまりの大的に。道德仁義禮智信の文字を面に書きならべ。御前にさし置き。謹んで申すやう。詞御代萬歳の御吉例次手よろしくさし上候。是は君子の六的とて國家の主たる御身には。片時もはなれぬ心的。先づ第一は道德的的小眼狙ひ付け。政道決斷事々物々。地あたれば國家泰平なり射はづせば國あやふし。第二には仁的天地と心をひとつにす。たとへば雨露の草木を恵み榮ふる春陽の。溫和の德を大將の寛仁大度とたつとめり。詞第三には義德的賞罰こゝにあきらかに。功ある武士をあげ用ゐ候邪の輩を追退け。地善惡理非の黒星の眞最中に射あつる事。論一張の弓のいきほひたり。地四五六は禮智信三つの的を心に懸け。かりにもあた矢有るべからず主君の禮は慈悲的。臣下の禮は忠的として親に孝的。朋友五倫は信的。政道輔佐は智惠的。拳のくるはぬ慎みに今日より此のまを。評定所につけられて然るべう候と。事理顯然たる辯舌に。將軍を始として近習外様の大名迄。あつばれ稀代の賢臣と。オクリ各々感じフシ居る所に。地桃井民部之介豐常。囚人を追ひ立て

大庭に引すゆる。調久國見るより聲をかけ。ヤア是々。貴殿の魚相我儘もをりに觸れては興にもなれ。お家代々御嘉例の。お弓始を知りながら遅參めさるゝのみならず。不吉尾籠の囚人をお目通へは何事ぞ。急いで罷り立たれよとはつたとにらめば。豊常むつとせしが押鎮め。ハ、ハ、ハ、ハ。春早々から老臣のお呵りに遇ひます。某所願の事ありて遠州諏訪の明神へ。社參の願ひは評定衆の。披露を以て我が君より首尾ようお暇つかはされ。極月二十六日に私宅を出てし砌より。今日の儀を心にかけて夜を以て日について。馬上に眼をしのぎつゝ佐夜の中山こえしは。夜半の過と思ひし頃。山間よりもおびたゞしき焰の上る訝しさに。かけおりて見てあれば。此のいたづら者たゞ一人樹木を倒し火を點じ。山を燒きぬき伐ぬいて早五六間ほり入りしを。引き出し打ちたゞき仔細を問へども返答せず。同類有りともしやせぬ言語に絶した不敵者。地搦め取りしは天晴な豊常めが年玉物。御披露頼み存するとフシ空囁いてあひしらふ。調久國かつら／＼と笑ひ。彌以て不覺人。桃井の家をつぎ評定衆の末席にも。連るからは是れしきの是非善惡は見ゆる筈。正しくきやつは土百姓。利慾のために谷間の。薯蕷など掘らん爲やみをてらす松明が。そこの樹木に焼移りあわてふためくたゞ中へ。其方がかけつけて無體にいましめせし故。地しさいをいふもおそろしくもとよりどうるゐあらざれば。白狀せぬもしれた事よし何にもせよ御祝儀の。お庭をけがすはいま／＼しい夫れ誰か。在彼の者をいましめ解いて追ひ放せと呼ばはれば遠侍。ぢやうじやく雑色立かゝるを。調豊常いかつて追ひぞけ。ヤア推參なり久國。おぬしがくさつた眼には土百姓と見まがへ共。水晶輪の目利には一しさい有浪人者。殊更もつて懷中に金五十兩たくはへしは。辻斬強盜まがひなし。山を掘り抜くなどとは底意の知れぬ横道者。御祝儀日とて差おくは女寵の物祝ひ。亂の治むは武の一德勝元殿の始めとして。仁木今川吉良石堂政道輔佐の老臣達。未だ評議も出ぬさきに今日此の頃のなりあがり。地出頭ぶりの廣言は得こそ堪へぬ持病あり。サアまあ一言はき出せとそり打て立ち上る。久國も太刀押取り騙け寄らんとする所を。人々中に押へだたり。理非はともあれ御前への。恐れぞひらに／＼との諫

めに折れて和いて。ちつと鎮まる主従の、フシ道の道こそ殊勝なれ。地勝元君にさしむかひ。詞兩人が口論も共に忠義の
つめ開き。地狼藉の儀は御赦免ととりなしあるもおとなしき。地頼兼御機嫌穩やかに就中豐常が。訴へつ一通り其儘
には指おかれじ。幸今川持參せし仁義禮智の的はじめ。俊秀詮議致せとの御意有がたく頭を下げ。縁側に進み出で。民
部之介に會釋して。詞暫くの内彼者が繩をゆるして今川に。預ける事はなるまいか。ハテ其元のお指圖なら。地とも
かくも連豐常は。其儘縛切りほどけば今川近く招き寄せ。詞汝様子は聞く通り。上意を受けて某が詮議を致上から
は。偽つても偽らせぬ。拷問杯せられぬうち。眞直に白狀せよ。して先づ分に餘つたる金子は何とて貯へしぞ。仔
細をきつといひ開け。さん候此金子合力主は我が娘。親の貧苦を悲しみて心一つに六條の遊女町へ身をうつて母が方
へおくりしは。孝行に似て不孝者身不肖に候へども。以前は近藤某とてれつきとしたる武士の果。土を食つて死ぬれ
ばとて娘をうつた金銀にて。口中はうるほされず。詞ゆきて主人になげけども。廊の法はもと銀にて。ひまはくれぬ
と承引せず。捨てられもせず五六年肌につけたる此の金子。地我手に在つて石がはら。他人の目には世の寶。フシ差
上げ申すと撒き散らす。詞ム、いうた所は武士一疋。その潔白な性根にて山を切ぬき樹木を燒き。非道のたくみは何
故かまへる。同類あらふ白狀せい。イヤア今川殿。武勇智謀も如何なこと貧うては世にたゝれず。誠や佐夜の中山
の地中に埋む無聞の鐘。つけば忽現世には富貴を得れど未來には。八萬地獄へ落つると云ふ。ア、愚かなる人心や
未來と言ふは僧法師の愚者をだます方便説。地獄極樂今日の苦樂二つの外にはない。我その鐘を打ならし。娘が
地獄の廊も脱ぎ。たえて久しき近藤の名字を再び顯はさんと。思ひこんだる平次兵衛同類としては候はずと。フシこと
ばするどに言ひ放す。地久國そばよりさし出であれ聞給へ人々。天晴武士の生粹かな出世を望むは先祖への。孝行と言
ひ武勇と言ひ。おく頼母しいお侍かさねて屋敷へ來られい。久國が取持つて知行の墓に取つかせん。今川殿の長詮議
御大儀々々ささりつと。是きりにして濟まさつしやれおゆみ始の時刻も延び。殿も退屈遊ばさんともどかし顔に立ち

騒ぐ。今川後へ目もやらず膝立なほし聲あらゝげ。詞汝大きな表裏物。ならべ立たる辯舌を。久國殿は殊の外御感心をなさるれど。此の今川はのみこまぬ。未來の沙汰まで言ひ破る發明な智慧持て。女童の言ひふらす無間の鐘をつくとは。某をなぶるのか但しは實に知らぬか。知らずば言て聞かすべし。そのかみ釋尊御在世に祇園精舎の鐘の聲。諸行無常のひびきあり。寒山寺の夜半の鐘。旅泊の夢を驚かし龍宮界の梵鐘は。地三井のながれに音をとゞめ高尾の三絶天王寺。六時堂の鐘の聲黃沙調のしらべ迄。無明煩惱のぞこりて菩提をすゝむる名はあれど。富貴利慾に荷擔入する有名無實の無間の鐘。千日千夜叩けばとて富み榮えうかうろたへ者。詞おのれに限らず世上にも愚痴文盲の侍が。追従言うてなりあがれば慾心つのり色々と。あられぬことに心付き下賤の者をかたらうて。地なせる事とは今川がとくよりにらみ付け置いた。一責せめば忽に白狀させるはやすけれど。小人の謀とるに足らねば用捨して。一命助くるぞ罷りかへれ。と言ふ聲も胸にこたへて恐ろしくフシかへりみもせず逃げ行くを。詞コリヤやいまして親父さて。娘を賣つた代金は此方へとよめ置。是は唯今お上より汝が貧苦を御憐愍。金五十兩遣はさる頂戴致と投げ返す。地這徳仁義禮智の的。あたりましたのお聲をばかけてぞ。頼む。三重へ春日影。梨子地に見ゆる鞍轡乗馬乗物追手口。大名衆の供廻り揃ひの縁若黨の。猶若やかな髪付に頭かつべる氷さへ。今朝解け初むる朝東風やしヤツつら寒きけしきせぬ。奴が髭の書初も春にひかれてえびす顔。物まうどれい年玉は。フシないくくとなはぶる。詞コリヤ新まいのお草履取。うつかりと心得たら旦那を迷子にすべいぞえ。今日のお装束すあうとやら。ながととやら。長たらしい物引ずつて。小人嶋の帆かけ船をすてつべいに打かづきて。鼓のない徳若ださ。既に去年も鹿藏めが萬歳の供をして。播磨迄のめつたとなぶれば關内真顔になり。いか様そちがいふ通り一國の大名が。あり興がりに其儘ちや。地弓始より姫始柱立てがな舞はしやうと。フシ一度にどつとぞ笑ひける。フシ日既に亭午に傾き御前をさがる諸大名。わきて三人なかよしの先に立たる細川は。乗物に手をかけて今川殿桃井殿。いざ馬にめしませい先其元に御召。と。互

に禮義細やかに　オクリ暫しためらひ居る内に。女房よんだら川へ投込め。く。榮華の春の花増に。若水を參らす御馬先ぢや。其處のけくとしざんぎめかしてかけ来る。地笠鉢花桶其の跡になりをかしげな立烏帽子。竹馬に乘りの繩手綱フシ見る目も餘り氣疎けれ。地勝元向に立むかひ。調町人共が初春の樂遊びと存せしに。まさしく樽井の兵藤殿。ハテけしからぬお物好。シテ何方へ御遊山ぞ。ハア是はく御家老衆。先づ以て御慶々々。自分が今日の扮装を。御存じなきは御尤。久國殿のおと娘上意を以て某が。妻に舊冬もらひしゆを。近習衆より花増を祝うて賜はる若水桶。地かうしたなりを我君へ一目御目にかけたらば。益御機嫌よからんと。御前へ上り候と。いひ捨て馬を乗出す。桃井やがて引もどし。調サイウつけ者よつく聞け。殿發明にましませども大酒をこのませ給ふ故。折に觸れてはばさらなり御行跡がなげかはしく。我々共が諫言はお耳にさはりて遠ざけられ。久國や其方が御機嫌とりくはえたるが。お心に叶へばとて傍若無人の振舞は。執權職を嘲るのか殿をたわけに仕立てるのか。フシ返答聞かんときめつくる。調兵藤びくともたじろかず。おろかなり桃井。忠臣の諫言は病をなほする良薬なり。されども見立の違ふ時かへつて毒となる物ぞ。天下の武將の御身にて酒宴遊興遊ばすは病にしては輕い事。それを何ぞやかた。くが國のみだれで候の。世上の聞えがあししいのと附子人參の補薬より。おもい意見をあてがふ故冷むべき邪氣も滞り頭痛八百なさるゝを。某杯は排毒散只一服でさらりつと。地御機嫌直す名人醫者。寄婆扁鵲も如何な事おいて樽井の兵藤と。フシ嘲る顔も惡醜なり。地今川莞爾と打笑ひ。調いか様さうもあらう事。療治は薬に功のもの一段くさりながら。竹馬にもせよ城内へ駒かけ入れんとする事は。不吉といはうか若しは又反逆人と定めうか。評議によつて其方を國法におこなへども。久國増とあるからは此今川ものかぬ中。あひ増がひに用捨する馬よりおりてわびせられい。地但は首を切らうかと三人左右に取りまいて。どうぢやくとせり付けられ。調ハアあやまつた御免なれ。地さうぢやく御ゆるしと馬よりおりてうろく。おそれて顔も赤猿のフシ三番叟ふむごとくなり。地三人一度に手を拍つて天晴

武士や御器量や。名字は筈棒幼名は。野暮太郎月恵方より。外法頭のお通と笑うてこそは。三更別れ行ッ民草の靡
 き靡かず家の風吹つたへたる將軍職頼兼公の御威光。朝日輝く東山今日の子の日の御遊びは。昔のためし新玉の。春
 に引かへ弓取の諸大名の奥方へ。名にし負うてふ姫小松取り囃せとの仰せを受け。思ひ／＼のはれ小袖をとこ尊む定
 紋を。御簾高々とまき上させ大將御出ありければ。例の山梨榊井の兵藤。近習の若人居流れて。御土器もとり／＼の
 品定め色定め。お目の正月御壽命はいきの松原末廣の。扇を顔に格子窗或は鼠鳴猫撫聲。オクリ晴れ／＼敷ぞ見にけ
 ス。シテ先一番の梅匂ふきぬのかほりもしめやかにちんまりとしてむつちりと。きむすめだちの姿は誰。ワキさん候
 あれこそは今日の子の日を末の世に。書きもつたへて覺帳仁木殿の命取。フシ名は巻筆と承る。シテフシ實に好まし
 き。かは鳥や。春の初のかきぞめに。ねやの大筆廻りよき墨と硯のこい中キンも。羨し又妬ましや。ねたみとあだと情
 との。三つをかきかねて一つまへはでに。はすはに。フシすんとして。いたづら顔に置わたも。怪氣は漏るゝ目のうちに。
 武士縛る下紐の。裾に。フシはのめくお敵は如何に。ワキあれこそあひにあひばれの。約束堅き石堂殿。石に立矢の通
 り者虎と呼ばれしお妾の。名も立かはる今年より。おか様なりの君候シテそれよ。誠に戀かぜの床に刻しき夜著蒲團
 虎うそぶけば千里が野邊。日本國が夜々の睡言口説手をかへて。男の心はかり目のフシ鬚髥こそ可愛らし。見るからぞ
 つと魂も。ぬけてや空にとぶ鳥の飛鳥井殿の姫もしの。御所の木ぶりを其まゝにねながら寫す水鏡。桃井民部が妻
 なんめり。ワキ天晴お目利違ひなし。フシ親はらからに似通ひて。器量優れて尋常に。利發餘つて會釋よく。歌書に
 さらせしふたかはめ。つくろひ。フシなしのかご島田。ぢつとしはりし笄の。お照の君と申とかや。跡はたれ白
 綾の。小オクリ裏ふき返す紅梅や芥子にくゝりし袖口も。あかねさす日はまばゆしときどく頭巾のうちらより。めもと
 のしほに寄る鯨大きな紋は隠れなき。勝元殿のぬれさまと。ハツミ粹が見立てゝ候也。シテげに春風に打蹴き。姿の柳細
 川がほそ身づくりの上作物。心詞もみだれやきはだへなごは知らねども。慥におはらざねもりの。フシめくぎ穴こ

そゆかしけれ。ワキ扱又あれは輕忽や。とりなりばつとだんびら者。かたちはほふ三郎が荒砥御しの新身かや。頬の赤いは宇都宮公道殿のあしかけか。フシ聞かまほしやとさどめけ。シテ名乗るも厚き顔の皮。赤松様が折に觸れあじやらもじやらも慾深き。わしが魂見すかして。歌煙草一葉が千兩しよとまゝよ。二千兩しよとまゝよ。裏の菊女に買てのまそ。やんれ買てのましよしやりむり買てのましよ。それがかうじて／＼とフシにつと笑ふも厭らしき。遙かに後に引下り。被衣は草に預けしと言はぬ計りにうなぎ綿。大事は前に有物を後帯とは屋敷めく。長地北の方めく上代めく伊勢や小町を脇立にならぶ方なき今美人。今川殿の御内方。あさかといへど淺からぬ中は取分け水際も。たつて見居て見どう見ても。是れぞきずなき玉あれ音は聞くより目で見てはしんぞ八幡こりやどうも。どうも／＼と響め立て。心を絲に頼兼公更に性根も現なき春の。あしたの一刻は萬金丹と氣の藥。離も野邊の小松狩千代に八千代に萬々歳才、目出度しとぞ祝ひける。地かくて五人の北の方小松を扇に取り揃へ。フシ御前間近く居流れて。地襟かき合せ手を支へ。詞誠に子の日の御祝ひ今日を千歳の始にて。地限り知られず盡きもせぬ松の葉の散り失せず。正木のかづら長き世の目出度き例候と。いひ揃へたる詞の花梅か櫻か桃井の。フシ桃の媚ある姿なり。地大將御氣色餘念なく遠目よりかは近優り。揃ひも揃うたばつとり者あつたら者を大名等に。賞翫さする殘念さよ。四五年前に子の日をば催したらば片端。我手に入れて遊ばふに扱も跡へん／＼と。思へどあの武士や矢竹心も打忘れ。酒が腰押す色好み御土器を取上て。なむ／＼と受給ひ。詞コレそこなきやら達戀故胸にせきすわり受けたる酒がのみ干されぬ。地誰彼なしに一口宛付けざしにしてくだんせと。戀慕の混る御上意に内方達は興醒めて。目と目を見合せ躍り退き立もたゝれず後には。俣人共が取廻しかなるめにか青疊。フシ塵をひねるぞ道理なる。地今川が北の方淺香と言ふはとしばへも。おとなしやかに進みいで。詞恐れも憚からず。女の身として上様をお直にをがみ參らす事。地其お嬉しさ有り難さ。袖にも身にも冥加にも餘る喜び候と詞の水の淀みなく。じつ體つくる體つくる。氣配の花も珍らかさに。大將

人目も辨へず手を取てぢつとしめ。詞我一天下を掌に。握つたよりは美しい此手を握る心よさ。地何に譬へんから
衣唐天竺も日本も取つて行けなるたのしみと。浮き立ち給ふを振り放し。詞ア、お情なや浅ましや。御酒に御心奪は
れて色に禮儀も御忘れ。國の政道法式迄父久國が愚かなる。心任せと打やりに遊ばす故に忠臣は。怨を含みて引籠り民
百姓の口の端に。地懸らせ給ふ御行跡恥かしきとは思さずや。詞扱今日の御祝ひお家代々嘉例として。赤松家より四
つ白のしゆんめに白鞍置かせ。破魔弓に鶴の羽にてはいだる矢。小松をおふせて獻上す。馬は陽の獸。是春の氣を知ら
せ。四つ白と書いては雪を踏むと讀ます。是雪間を分けてとの吉例にて。弓も松も駿足も今日の例に引かれたり。又
赤松の名字をば今日一日は若松と。稱ふる故實候も子の日の縁に寄せらるゝ。かゝる日出度き例をば改め女中の小松
狩陰にだくして陽を害ふ上に好むを風と言ひ下にならふを俗と言ふ。かく尾龍なる風俗を天下國家に及ぼさば。地賤
が伏屋の翁驥迄色にふけりて朝夕の。渡世を忘れ末々は。飢ゑて凍えて盗みをし世の亂れともなりやせん。御思案遊
ばせ殿様と。或は諫め或は泣き。こぼるゝ涙青柳の。糸につながぬ玉なして。フシ風にもまるゝ如くなり。詞久國怒
つて。ヤイそこな不孝者。親の厭ひな學問達つべこべと聞とむない。かたくなむこの今川と闇の睦言癡話言にも。引
き言いうて夜を明すか。忠臣は主の爲一命をさへ惜しまねば。況んや女房の付けざしなど。こび／＼格氣はせられまい。
地親孝行ならちやつとのめ。やれのめ／＼と座をもてば。浅香榮爾と打笑ひ。詞差合ひくらぬが當世とをしへ給ふも
親の慈悲。先忝なうござんする。殊更此程樽井殿酒落れた風俗遊ばして。細川桃井今川は療治の見立が悪い。御
嘲りにあはれし由。地連添ふ身では腹が立つ何とぞ恥辱を雪がうと。女房仲間が寄合うて無い智意出して居る折柄。
今日のお召を幸に夫にかくともしらせずして。館を出し我々が諫めを御耳に留まりて。御酒も今日よりあがるまい。
色の道をも嗜もと御誓言を夫への。土産にすれば歸らるゝせんなき事には我々が。徒遊びも同然故互に覺悟極合ひ。
恐れながら双物をば懷中致し候と。五人の女房一同に守刀を抜き持ちて。只今自害致すのを。不便と思召されぬか。御

誓言は出ませぬか。曲もなき大將様お情ない我君と。ステ泣き叫びたる聲々に。地將軍も近習も酒の酔ひ迄さめ果て
 フシ座敷はしんと澄みにけり。末座に有し惡女つか／＼と走出て。詞お座がしめつてお笑止な。爰らをわしが捌きませ
 う。將軍様も輕忽な。いかにお金が澤山でも三百目宛五人前。つひえなかねを捨てうより色少し黒けれど。地夫なし
 鴉を自らが口添へてやらうかえ。歌牡丹芍薬百合の花。菜種の花にも蝶は寄る。地何處やらよい味もちつゝじ。取り
 ついてからいつ迄も離れぬ所が調法で。ごはりまらすでごはんすと。フシ立寄所を。地後より兵藤驍で引戻し。詞お
 のれ大きなまいす者。形は女言いは草履擲の中間口。いそいで化を顯はせと。地頭をたゝげばすつほりと蠶はぬけ
 てすてつべい。中間額の荒男びつくとしたる氣色もなく。詞ちくとん計小眼てよく見だされた二才殿な。下拙は栗生
 茂太八とて。二合半扶持かぶる下郎めてごはりまらすでござります。お歴々の御參會七五三から五々三から。蒸菓子
 干菓子藥酒流れ歩いてござるべい。のめり出たらどん腹にくはつけいさしよと存じたに。茶碗酒にも出會さぬフシひ
 だるいことだとゑせ笑ふ。地勢ひ猛き有様に將軍驚き給ひつゝ。奥を指して入給へば在りあふ者共一同にフシはら
 りと座敷を立にけり。地内方達は思ほえず虎の尾を踏み罫の口。遁れ出たる心地して。双物も鞆に懷に袖つま合せ
 帯の皺のし／＼立つて行所兵藤奥よりかけ來り。詞其處な奴め待おろう。おのれ下賤の身をもつて上を侮る狼藉者。
 地それ餘すなと下知すれば家來の者共數十人。抜きつれ／＼切りかくる。まかせておけろと茂太八はそばなる大木。え
 いうんと抜くより早く振り上げて。むかふ者をば拜打すそを拂へば毆打。縦横無盡に打ち拂へば皆ちり／＼に。三葉逃
 げてんげり。オ、さもさうず／＼。女とも見え元來は男なりけり。業平に。器量は少し落ちたれど無病息災まめ男。
 灸の痕なき無疵者。顔はぬり砥の荒女房奥様方のお供して。往んだらはねつこ手鞠つこ。歌サハリ西の風もな吹いそ。
 東の風もな吹いそ。枝を鳴らさぬ時津風。キン君が齡は八萬歳。己等が命は茂太八百。ういやつ／＼やつこの／＼。や
 つこなるはと皆人興じあへにけり

第

二

傾 城 無 間 鐘

地八隅知る君が叡慮にかけられし。加茂川の水雙六の。骰子のめよりは情もなき人をフシ戀めぞまゝならぬ。増されば將軍頼兼公過ぎし子の日の姫小松。引わづらひし今川が妻重ねじと義理立てが。小面憎いも色の意地情知りめを聞出せと。久國兵藤かけ廻り廣き都を北南。地西六條の遊女町態よき松の名も高き。今川と言ふ傾城をフシ後先なしに根引して。フシ移し植ゑたる。花の御所。名さへ顔さへ姿さへ。濡れてまろめし今川の流れの身とは名のれども。長地深間の客に二世三世結び固めて下紐の。外には解かじと神かけて。表面許は藤柳。しなへ臈かぬ心の水。春の光はさしながらつれなき氷はり強く。殿をばふつてふり付けて。木ぶりもすによき勘松の。枝さし交す盃を。抑へずのまずあひをせずひん／＼としてうちそむくフシ是れも女郎の一くせなり。地久國見るめも氣の毒さにさしよつて小聲になり。詞コレサお女郎。揚屋などでは大盡をのぼすとやら持たすとやら。様々仔細有ことゝ咄に聞いたれど。此方どもは不案内。御殿中のお遊びはじやらくらりと頭から。小舌だるいが御好物。誠に女は氏なうて玉の輿に乗るといふ。諺はお身が事。地ひよつと御機嫌損ねたら後悔しても返らぬと。フシ身になり顔にこま付る。今川えせ笑ひおいてくだんせ親父様。詞既にお前のお娘御が子の日の遊びのもや／＼に。殿御へ義理を立切て見事なさはいて有つたげな。地お素人には奇特な事況や以て朝夕に。をつとへの義理心中を商賣にする傾城が。さもししい所存が持たりようか。まだな事と言ひさして。フシ櫛持ちかへて撫で付る。地黒髪よりも將軍のお心猶も打亂れ。餘り情がこはいぞや戀には義理が有ことゝ。知つたればこそ大將が此の寒い夜をうご／＼と。丸寝して居る心底をすもじ遊ばせ粹様と。もたれ給へばちやんと退き。地下からお出て遊ばしてもしぶとい心な此の今川。きりなりとも突きなりとも耳でも鼻でも削がしやんせ。請られて來た言分ををつとへ立てゝ見せたいと。眈にほろつと零るゝは。露かあらぬか初梅の匂ひを。

わくる景色なり。地久國ほうど持て扱ひどうも急にはいきそむない。先づお能でも言付て腰を慰め申さんと。打咄けば兵藤も如何様それも宜うござらう。詞それにつき今日はお鷹の祈禱とて。猿を舞はせて居りました。中々興ある慰み故御しやうらんも有らうかと。地お次にまたせ候が是はいかゞといひければ。一段のお慰み。急いで参れと言ふ聲に

風流猿まはし

オクリ牽かれへ出づるや。フシ猿まはし。小腰を折つてうろ／＼と廣廂に畏まる。詞兵藤見るより。ム、近くよれ／＼。慮外は御赦免さりながら頬被を取ませい。ハア御説ではござれども。猿まはしの法としていかなる高家の御前でも。此の儘で居ります。フウ法と有るからは苦しい。地急いで猿を廻しませ。詞畏まつてござる。狂言猿が参つて能仕る。御知行くわつとまさる目出度き。オクリ踊るは手もと。べたつち見馬やまきおろしの。春の小馬が参つたり。地より泉がそうじやうすれば。天より寶が降り來つて。人命草木。そうじやうすれば。南面の泉水に積んだる寶は何々ぞ。綾が千反錦が千反。唐物を積みたゝへてハンヤ。きん田のよこ田の。朝霞しよんぼりしよぼりと。植ゑうづ物。しよんぼりしよぼりと來ました。そなたの庭を今朝こそ見たれ。黄金の柵にてよねを量るに。フシよねの心を量るに。地よねと言ふのに氣が付いて聞ば聲から姿から。ナウ新様ぢやないかいのと。走りよるをア、申し／＼。詞鹿相を仰せられますな。成程新猿々々牽。人怖ぢをする若猿のかき搜したる。地搶頭、亂れてからは難しと言はれてちつと跡へより。詞ア、猿と言ふものを目留めて見たは今日始て。地可變らしやいたいけやようこそ爰へ來てくれた。定めて物がいひたかる但は何も言はざるが。お主はよいと思ふかと。フシよねをへていふも何とやら。詞久國は聞咎め。ヤイそこな不敵者。姿をかへて我々を一杯食はせにうせたるな。昔もさる例有り。傾城事のおこりより大黒舞の鳥追のと。世上の沙汰にものつたれば如何な事油斷はせぬ。而もおのれはたつた今新猿牽といふからは。にせ物にまがひがない。

地言譯あらば吐き出せ。然なくば爰を立たせぬと鎬もとくつゝるげ立ちかゝれば。詞ア、申し。それはお前のお聞違へ。身共は代々猿廻し。猿數多ござれども初春の御祝儀故。若猿を牽きましたを。新猿かとお尋ね故左様でござると申たが。誤ではござるまい。イヤ言譯がくらく。地誠代々猿引ならおむまの御祈禱に。猿をまはする故事來歴今爰でいうて見い。詞コレハ。苦々しい。此の儀は我等が仲間でも秘傳に致ことなれども。申さずば又にせ物とお咎めに遭ひませう。必他言致さしめすな。總じて猿と言ふ物は。千年の壽命を保ち。漫々としたる猿智懸有り。諸藝に器用なることは人間にも勝るとて。異名をましらと申すなり。就中亂舞が上手故猿樂とも名付けた。豆腐が過ぎて候故田樂とも是を言ふ。馬と言ふ大ばやしは背に物を置くより外。一藝もござらぬ故猿殿のお蔭にて。亂舞がしたいと頼みしに。地たいこの傳授致せしより。今に至つて馬共が。太鼓を打て遊ぶこと。フシ師匠の恩と悦びて。廟の守と尊めり。馬に限らず人間も裸参りをする時は。オトリ諸願必ず庚申。淨土宗の祖母達は。オトシ猿猴大師と拜むとかや。地縁由は大略此のとほり。お疑ひなさるゝなとフシと口に任せていひ散らす。地文盲不智の久國はんくはんとうなづきて。詞出かした言譯聞届けた。現々猿めはうらやましい長生を爲るやつかな。定めていつがいつ迄も夫婦の中は睦まじかる。猿牽暫時差俯向き。由ない事をお尋ね有り。思はぬ落涙仕る。地畜生の身の上にも變らぬは浮世の中。此奴が母猿父猿はあるが中にも睦まじう。千代もとかけし間なるを無得心なる親方めが。銀にめくれて母猿を思はず外へ賣り渡され。跡に残りしやもめ猿朝夕泣いてをりまする。されども男猿は生れ付性根のふとい者なる故。たとへ暫しは別るゝともめぐりあはいで措くべきか。只それ迄の命こそ大切なれと覺悟して。身を謹んでをりまするが。詞ア、不便やな可愛やな。女猿は心ちさうてまゝならぬ身を怨み詰め。地短氣な心もおこらうかこひ煩うて死なうかと。其事ばかり明暮に案じ惚れたる男猿めが。心の内を露計傳へたう候と。ヌエテしやくり上たる物語。聞ては如何こたふべき心迄くる涙をば。しがらみかけて今川はとどろく胸を押鎮め。詞イヤナウ猿牽。そなたは猿の

身の上を物語しやれども。地聞けば聞く程さりとては可愛い男猿が心やと。我が身の上に引き當てゝ。フシ過分に思ふ嬉しいぞや。地深い中をば引きはなされ請けられて來た其の日より。晩に死なうか明日かと輕々しげに思つたる。命が大事になつて來た。かういふ心になつたのも男猿が通つた心中を。話したそなたは命の親。手を合はして拜むぞや戀しき人にあふ迄は。勤と思やさのみにには情氣妬みも有まいが。命の綱と殿様に折に抱かれて寝もせうと。フシ始めて見する笑ひ顔。地將軍悦び給ひつゝ抱き寄せ引寄せて。ヤレ猿牽めに酒のませかねを取らせ衣裳もやれ。是は當座の褒美ぞと下し給はる御佩刀。久國もやれ兵藤やれくとは嬉し今川も上着を脱いで投げ追れば猿も悦び猿牽も肌縁の絛綸子やがて逢ふ身と疊み込み。御座の邊へ式禮し。オクリいそぐとして立歸る。地兵藤御前にさし向ひ。詞先づ以てお目出度い。猶此の上に某が智謀をもつて俊秀を。何の手もなく打殺し女房奪ひ差上ん。地此の儀如何と伺へどさういたせとも無用とも。答へもあらず恍惚と魂は早寢所へ。飛び立つ計大將の近がつゑこそ。三返、是非もなき。地今日よりは我をもちゐる鏡草咲きさかえたる君が代に。忠義の味方不義の敵二つの底を三つ物組。歳旦開きとなぞらへて今川桃井兩人も。細川宅に招き寄せ。世を非に見たる老武者の。地虎の眠りや文豪脇。硯の水も零れ月裏に映りてはなやかに。戀句は君の御好物。したる過たるお身持も。匂ひの花もをさまりて。あげ句は春の抜ひに。フシ近くへ寄りてぞ語りける。地勝元悦喜限りなく誠に連俳などとして。武士が慰みくらす事四海靜謐我が君の。御盛徳の餘慶ぞとサテく満足仕る。詞來月の會席は御兩所の内いづれへか推參を仕らう。今川ためらふ氣色もなく御尤には候へども。今宵の御會は格別の儀改めて又來月も初會は御館へ參るべし。日限のお極一願お廻し有べきかと。彈りをかへりみず發句を致し置き候。コレハく忝い何とちやく承りたい。しるやいかに。しるやいかに。かまくら櫻八重櫻。鎌倉櫻八重櫻おもしろい。桃井殿。出來たぢやござらぬか。なか。なか。歌人の家でござるから。ちらりく。とまたしても。仔細なことが出まするてや。ハ、ア是はく御挨拶千萬痛み入りました。句は悪うござれと

も所存が有て致いたが。細川殿にはお心がつかぬさうに見えました。成程々々最前から申さうと存じて居た。鎌倉山の松とこそ歌に詠み馴れ候に。櫻とかはるが俳諧の手際所と聞えました。桃井何と思召す。サレバ拙者は左様な故事來歴は存ぜねども。八重一重は九重。九重は都の空いせ櫻江戸櫻などにほひ渡ると言ふことぢやと。聞いておいても濟みまする。イヤ今川が所存は左様の儀には候はず。頼兼公の御行跡日にまし月にしたがうて御酒宴長じ給ふに付き。御病氣など出でたらば御快氣の程覺束ない。若君としては候はず萬一の儀が候はゞお家はやみになりまする。御先祖尊氏將軍の。御家督は義詮公。御舍弟基氏公鎌倉の守護として取分け武名を輝かし。地御連枝兩輪の如くにして年は百歳代は十繼。今迎も又京鎌倉遠くもあらぬ御一門。御男子數多ましませば御養君に迎ひ入れ。細川殿は御後見桃井今川相加はり。政道評議仕若木の櫻を花咲かせ。四方の空迄長閑にと。一句に仕立て候と。フシ思ひへこうでぞ吟じける。地思はず知らず桃井は二王立にずつと立ち面白く。歌人は居ながら名所を知る。俊秀殿は居ながらに。名大將を知つたれと。あふぎ立く。フシ悦びあふこそ道理なれ。地勝元も手を拍つて誠に文武の今川殿。十七文字の其の中に天下を治むる金言は。唐土の詩賦天然の靈文なりとて恐らくは。是にはいかで勝るべき。詞いでく勝元脇致さん。巢なる燕に猫の爪研ぐ。俊秀堯爾と打笑ひ。巢なる燕は頼兼公下なる猫は倭人共。天下に爪を研ぎ立つるを物陰より黙々と打まもるとの心よな。桃井は大聲揚げ差詰第三仕らう。長き日に夜討と言ふは。珍らかになんとばしござらうぞ。兩人をかしがり面白さうにはござれども。夜討ははあまり過まする。ム、夜討がお氣に入らぬなら。ぬけがけと直りましよ。イヤとてもなら第三は。目出度いやうに遊ばされい。きこえた拙者も故事を仕らう。食くうて。箸を落すも麗かに。此儀はいづれも知つてで有らう御前において久國めが。食くふ箸を取落し近習外様の笑ひ草。地なんとよい句か。と兩人どつと笑へども。地今川獨りすまぬ顔挨拶もなく座を立て。私宅に用事候へば拙者はお暇申すとて。亭主へ時宜もそこ。に立ち歸らんとする所。桃井やがて引きとめ。詞貴殿が顔付のみこまぬ。舅を

そしつた某に意趣を残して歸るかとはつたとにらめば。今川はから／＼と打笑ひ。はれやれ興がる男が有遺恨を含む程なれば二言とはない打ち果す。今宵の八つに參れと有る君の詔意を承りながら。興に乗じてはつたりと今迄失念致したと。いはせも果てず。ア、こりや／＼其の紛らしは猶濟まぬ。遊女狂ひに夜晝のわかちも知らぬ大將が。お主になんの用があらう。地よし何にもせよ大切な座敷をけたつる無縁者。一寸なりとも踏み出さばすね切りをらんとつめ寄るを。詞細川驛をかけ桃井殿御無體ぢや。叶はぬ御用と有る上にたつてとむるは不調法。しかしながら勝元がちと御意得たいこと候。お際は取らさぬ暫しの内。地是へ／＼と招かれて。はつと計りに兩人はフシもとの座敷に直りける。詞細川小驛になり。只今申合せし儀はいゞお家の一大事。一門扱は朋友にも互に他言致さぬとの。御契約申さうと傍に有りあふ蓬萊の。地土器取つてうど請け腕を突いて血を絞り。さらりとほしてさし出すを今川如何思ひけん。物をもいはずあしらはねば桃井中へずつと出で。某お合申さんとさしぞへぬいて太股を。ぐつとをぐつてだんぶと請け俊秀慮外致さうと。ついとので投げ出す。地今川受取り押戴き。詞先づ頂戴は致いたが。朋輩の約諾は私にして義理かるし。主君の恩は天下の義理但心の變るべき。今川なりと兩人のお鑑識有ての事ならば。一つたべてもらぬ事。地殊更夜中のお召しは。岩清水へ代參と。仰せられんも知れがたしすれば不淨の恐れも有り。御酒は重ねて／＼といひ捨て歸る今川が。智慧の淵瀬は白波の。二人は残る友千鳥。フシすまぬ座敷となりにけり。地勝元はつと溜息つき。詞桃井あれは何とぢやの。何と所ぢやござるまい二人が心てい聞賺し。あまさかさまに御前へはいひ散らさんとの謀計を。うま／＼と食てのけた。最前仕舞うてのけたれば此後悔はないものを。地と有てきやつをのめのめと御所へやつてはおかれまい。追つかけて討つまいかといければ勝元打うなづき。生て置いては國家の仇は計りは短氣がよい。サア行けござれ合點と。股立刀取り敢へず目釘に心付合て。仁義と血氣の力足どう／＼。ばた／＼立つ鳥の飛がごとくに。三重かけり行。地後とはいはい今川が心の駒もはだせにて。勝元が秘藏せし柑子栗毛の逸物を

案内なしに乗り出し。腕を限り鞭限り叩ませし泡はちら／＼。蹴立つる煙はむら／＼。霧復ふ白牡丹匂ひはいざや白雲の。空をかけらせ行先に外道見付けし韋駄天も。フシ斯くやと思ふ景色なり。地後に續いて細川桃井兩人は。息を限りに追かくれど龍蹄の勢ひ何かは以て屈くべき。遙か並木を隔てしが桃井豐常小高き岸に立ち上り。詞ヤレ待て今川。今敵味方となる上に後を見せぬ卑怯者。主に弓引く天罰何國までか通るべき。天は八天地は奈落金輪際通さぬと。大音聲に呼ばはりける。地勇みに勇む今川も東風に持て来る人聲の。敵味方と呼ばはりは早大事こそ起れりと。進む手綱を引きかへしフシ暫く控へ待ちかけたり。地程なく兩人かけ付けて舅に勝る人てなし。詞武士に大事を語らせて悪人への注進か。それは叶はぬ今爰で死出の旅路へ鞭打す。閻魔の廳へ注進せよと口を揃へて詰めかくる。今川少しも驚かず。ハテ方々と存じたら躊躇ふ事もなかりしに。地由なき時刻移せしと又鞭打てかけ出づるを。兩人は立ちかゝり馬の兩口緊と取り。詞此の場になつても遁れうとや。のぶとも相手による。コリヤ。桃井が留めたが動きたくば白狀せよ。地俊秀猶も鞭打て。急ぐといふに邪魔するな退いてとせとかけ出す。コハリ留れ。と留むる桃井は天下無雙の大力。驅ける駿足名譽の鞭勇めば。返し留むれば進みもみにもうだる。地有様は。滄海の蛟龍がフシ波を分くるに異ならず。詞勝元は大音上。天下の人に賢人の名を歌はれし今川が。利慾に眼が眩んだか女房に心奪はれたか。仔細を語れと呼ばれば。俊秀後へ振り返り。あら曲もなき御一言。是非に及ばぬ某が所存を語て聞け申さん。御前に於て久國が持たる箸を落せしとな。遠き昔を考ふるに。魏吳蜀の三國鼎の如く争ひしに。蜀の玄德曹操が心を緩めん計略に。二人對して食する時はためきわたる。雷に。恐れ戦慄く風情にて持たる箸を盤に落す。曹操つく／＼打凝視り臆病者よと玄德に。油斷の心起りし故果して軍に利を失ふ。愚蒙の久國それ程の思案は有るまじさなり乍ら。手に持つ箸の落つるをば知らぬ程なる白癡でなし。内に思ひの迫る故萬事を忘れし物ならん。彼今榮華に餘り斯くまで胸に迫つたる。思ひといつば逆心なり。然れば君の御身の上册う言ふ内も氣遣はし其處退き給へと言ひけ

れば。兩人はつと驚て。左様の大事をおしかくし忠義を一人立てんとは。大人氣なしや今川殿のいざ御供と勇み合ふ。ア、愚かなり。お主の爲に身を果すも生きてお家を治むるも。忠義に重い軽いはない。日向の前司は某と堀尾の縁あり。方々の手にかけては世の人口も如何なり。早々歸つて御譜代家の軍勢催促なされよと。言へども桃井合點せず國治むるには智慧が要る敵を殺すは力が要る無分別なる桃井は討死するが勝手ぞと。地言ふより早く驅け出づるを勝元暫しと抱き留め。詞思ひ込んだる今川殿今更引いては歸られじ。地其の身一陂分身の。盃に約せしなり。目出度く爲果せ給ふべし急げや今川。返せや桃井さらば。と禮儀して。左右に別る忠義の道行くも歸るも善惡の。欄に枝折る道案内。オクリ駒をへ早める。フシ向ふより。地町人數多出て迎ひ。詞憚りながら御訴訟申し上げ候。我々共は六條の傾城屋にて御座候。商賈體の女郎を毎日十人二十人。御城内へ召し入れられ。代金の御沙汰もなくかつみやうに及び候。御家老様の御慈悲を偏に願ひ奉ると恐れ入りてぞ申しける。俊秀打領き尤も。某も只今登城相動むる。地宜しく沙汰し得さすべし御門近くは見苦しい。今川が屋敷へ行て暫く待てと言ひつければ。是は有難しさりながら追手の御門を打せられ。詞御老中でも入れますなと久國様の命令を。慥かに只今承る。地折角お出てなされども。中々通し申さじと口々に訴ふれば。地天晴頼智の今川もはつと思案に行き當り。詞何と申すぞ久國が我々共を入るゝなと。追手の門の打たるか。地南無三寶遅れじと。スエチ暫時呆れて立ち給ふ。詞町人どもは差寄て。憚りながら我々が料簡に付き給はゞ。此の乗物に乗せまして又珍らしき女郎を差上げますと偽らば御門は通し候はん後の難儀は知らねども有難きお裁判に。あまえて申し上げますと詞を揃へ言ひければ。今川大きに悦びて。地屈竟の事ござめれとオクリ馬よりひひりと。フシ飛んで下り。地乗物に乗り移れば大勢一度にばらりと寄り。懸ける細索七重八重包み回せば今川は内より怒れる聲を揚げ。詞奴汝輩騙つたな。鑽石を以て包めばとて打破らでは置くべきかと。地力を出しえいえいと打てど撲けど角々に。鎖筋金網覆ひ。フシ出づべきやうこそなかりけれ。詞下部共聲々に。御主人榊井兵藤殿。

お手前への御馳走に用意なされた牢乗物。湖へ伴れて行て生きながら水施餓鬼。地なほど泣いても籠の鳥鶯聲に經を讀め。四相を悟る今川を生捕々々。安賣の今川ぢや。毀ち賣の今川と、フシ笑ひざどめき行く先の。地木陰よりも若侍五人抜き連れて。隙間も有らせず切りかくる。思ひがけなき下郎共周章で狼狽き我一と。乗物捨てて逃げ行くを遁すまじとて追ひかくる。中に色有る若男取つて返して乗物の。索す々に切り解き手を取つて牽き出し。見れば互に知らぬ顔。ハア違うたは南無三寶。是はく狼狽へしが腰の刀をすらりと抜き。すでに自害と見えけるを今川やがて手に縫り。詞近付でない某が命を助け其身は又。生害せんと有ることは何とも其の意得られぬ儀。地仔細な語つて其の上に兎も角も遊ばせと。詞を盡し制すれば。詞さん候某は東寺邊の浪人者。今川と云ふ傾城と子までなしたる中なるを。頼兼公へ召し出され飽かぬ別れに堪へかねて。友達共を相談合ひ御城内へ忍び入り。奪ひ返さんと来る所に今川の生捕と。呼ばはる聲を聞くよりも前後を忘れ斬り散らし。人數多殺める上科人までを助けしは。地何れ免れぬ運の盡き様子と言ふは此の通りと。復振り斷るを抱き留め。詞些とも苦しからぬ事。自分は今川俊秀とて國の政道致す武士。悪人どもに謀られて不慮の難儀に及びしに。命の親か天下の親。地御恩の禮は御秘藏を取り戻し進せうと。力を付くれば手を合はせ互に悦び居る所へ。又々大勢馳せ來り。先なる男大音上げ。詞ヤア卑怯なり今川。兵藤殿の御内にて。桑原茂七と言ふ男討手に向うた覺悟せい。扱又前なるきよろまつめ。素町人の分として科人を隠まひ立。地命知らずの不敵者いで物見せんと驅け寄れば。こなたも同じく腕捲りづかくと差寄つて。詞汝如きに某が家名を名のるは無益なれど。冥途の土産に能つく聞け。桓武帝の末葉に伊勢新三郎長氏。地參ぞうと言ふ儘に兩方一度に抜きはなし。フシ火花を散らして戦ひける。地もとより長氏早技の隙を見かけて打つ太刀に。眞向二つに切り割られかつばと倒れ失せにけり。こは無念やと侍共一度に喚いて驅け寄るを今川太刀を抜き翳し。當る者を幸にはらりはらりと薙ぎ立つる。さしにも逃る者共二人が名譽の太刀先に。叶はじと思ひけん。フシ皆散りく逃げてん

がり。地長氏勇んで駆け行くを。詞ヤア深入すな早まるな。あつたら器量を損ふなやがて目出度く今川が仲人をして今川を持たすぞ。待ちかねな。地暫しは國を立ち退いて榮ふる時節を松竹の。齡は千年萬年も命冥加な俊秀が。忠勸勵む天命の備はる道の臣々たる。明徳爰に顯はれしと皆人感じ合ひにける

第三

地梓弓取り傳へたる武士の。家の吉例格式は違へぬ春の事始。男の留守も間に合はす鏝を床にかざらせて。重代の太刀しづ方の長刀持つて牀几に坐し。軍配團扇指し上ぐれば仲居おはした腰元まで。見馴れ聞き馴れ手馴れたる小太刀の極意槍の秘事。上段下段見合はせて。オクリ彼方へへ潜り此方へ飛び。ハツミ柳に燕。フシ百千鳥。姿の櫻。みよし野の屏風繪を見る如くにて。春めき渡る。フシ景色なり。地斯かる所に女一人駆け入て北の方に縋り付き。後より追手の掛る者。影を隠して給はれとスエテ聲もしどろに手を合す。地淺香つくく。凝視り。詞此の邊にも見も馴れぬざりとはすはな態度は。地大事の肌を澤山に商ひにする女中よの。心中に出て中途から不圖思案でも變つたか。すべに依つて頼まれう有様に仔細を言や。詞成程御推有通り今川と言ふ流れの身。日毎に顔は變れども誠を立つるは唯一人。地深い中をば引裂かれ久國殿に請けられてと。言はんとするをや、是。詞後を聞てはかくまはれぬお家の忠臣今川が。地女房が頼まれた氣遣ひなしに奥く行て。疲勞て有る休ましやれ皆の者共油斷すな。定めて追手來るべし門戸を閉めて追ひ返せ。異議に及ばは堀越に根無矢放して追ひ散らせ。必ず双物で向ふなと急な所に主従の。禮細密に言ひ含め其の身はもとの牀几に坐し。常に變らぬ顔は。フシ天晴武士の女房なり。地暫時有つて大門を破れと碎けと打ち敲く。そりや追手よと女房達羣々と立ち掛り。詞何者なれば喧しい御一家中をお節にて。座敷は酒宴の眞最中。お迎ひの衆が行んでおちや。地小間物屋なら挿櫛を明日買ふと應答ふ。詞イヤ私ちや茂太八奴ちや。地そんなら疾くに

言はいでと潜開くれば一散に。お座敷へ駆け上り北の方を屹と見て。詞ム、早先達お館へ。注進の有りしよな嬉しや健氣な御有様お供致して片端し。地斬つてく斬りまくり御殿を枕に主従が。深う死にませうさあいざく手を取つて。怒れる眼に血筋立ち拳を握り齒を食ひ締め。フシ様子も言はず急き狂へば。地浅香は餘り興醒めて。詞ヤイ龜相者。今日は鎧の御著初。なれども主は夜前より御所へござつてお留守故。名代勤むる有様を珍らしさうに咎むるは。酒に酔うたか但しは又口論でも爲て來たか。スリヤ御存知はなされぬか。旦那は夜前暗討にお遭ひなされて候と。地大聲揚げて叫ぶにぞ浅香もはつと取り亂す。心をちつとおし鎮め。詞何ともそれは吞込まぬ。お供に付いて其方が慥かに様子を見届けたか。さん候拙者奴は夜前町家に一宿し。只今歸る土手道に。一二町が其の間、草葉を朱に染めなせり。こりや何者の閑靜そとけしからず胸さわぎ。立ち休らひし向うより兵藤が草履取某に聲かけて。お主が主の俊秀を上意を承けて。身が旦那。此の處にて討ち留めし褒美と有つて只今も。御太刀拜領なされしと名乗つて通るを飛び掛り。何の手もなく突き殺し血刀堤げて城内へ。駆け入らんとは存ぜしが。地お前に知らせ申さん爲立ち歸つて候と。急けば詞も後や前諺と誠の界をば。浅香は更に分けかねて眉を顰めて思案して。とつとついつも早速にフシ智恵の出ぬこそ道理なれ。地茂太八は氣を急いでさあ兵藤を討ちましよか。但しは惡の本絢の久國殿に致さうか。寧に御所へ亂れ入る御覺悟かと伺へど。答へもやらす泣きもせず常に變らぬ顔付に。茂太八苛つて聲荒らげ。詞年來日來御心てい見損うたが無益しい。義理になりとも最前より泣かいて叶はぬ場所を。さうりけもない有様は。親子の間に篤りと牒し合はせて有つたもの。道理こそく。今日よりは大將の御臺所のお身なれば命が惜しい筈の事。斯う打明いて言ふからは最早伺ふ事はない。地片時が内も兵藤奴が首をば胴に附け置いては。冥途の主へ不奉公いて引き抜かんと飛び出づるを。鎧を取て引き戻し。詞コリヤ爰な慮外者。女の主として侮るか。逆上したる魂を撫り下して能つく聞け。何ぞや久國兵藤が愚かな智謀に乗せられて。討たれ給はん俊秀と日来に思つて仕へたか。さは言ひ武士の運

盡きて闇討に杯遣ひ給はば。地無體の戀慕遊ばせし我が君よりも自らに參れとあるのお使に久國殿か兵藤か。地追付来るは知れた事欺し膝して引き寄せて。たとへ親でも一太刀は討つて夫へ手向けうぞ。跡はお主が存分に粉に碎いても腹をいひ。只今言うた雜言を憎いと更に思はぬと。賺しつ宥め居る所に門荒氣なく打ち敲き。榎井兵藤大音上げ。詞我が君よりの上意が有る急いで開けと呼ばはれば。地茂太八纏て立ち上るをやれ未だ早い自らが。聲かくるまで顔出すな。人に見られぬ覗くなど。オクリ無理に一間へ押し入れて。地門を開けば兵藤は隅々つまりまで。眼を配り氣を附けてフシ上座にどつかと押し直り。地使者の趣面談に申し入るゝもお止しや。地日來は忠義の俊秀殿何と思案が狂うてか。惡黨大勢談合ひて君寵愛の傾城を。夜前盗んで出でられしを主命なれば是非もなく。地唯一人追つかけて首討つて候と。家來に持たせし器物淺香が前に差置けば。是れはと狼狽へ蓋を開け見れば面の皮を剥ぎ。我が夫とも他人とも辨へかねて凝視り。鬢搔き上げ顔を撫て訝しげなる有様を。詞兵藤ちやくと詞をかけ。オ、不審なは道理道理。膝の下に引敷いて首をかかんとせし時に。俊秀暫時と取り付いて。討たるゝ命は惜しからねど不忠の武士の死顔を。地主朋輩に見られん事思へば。恥かしい。料簡顧むと歎いたる。最後の一言不便さに面の皮を剥いだるは。兵藤が情ぞとフシさも有りさうに言ひければ。地淺香は少し嘲笑ひ。詞天晴お手柄さりながら。此方は一人惡黨は大勢有るとの物語。斯くゆたやかなる舉動を其の者どもは見て居つたか。地但しは眠つて知らぬかと問はれて兵藤行き討り。詞誠にく失念した。大勢斬つてかゝりしを弓手馬手へ投げ倒し。中に獨小賢しき新三郎と言ふ奴が。後へはどう抱き付きしを同じく膝に引敷いて。地首捻ぢ切つて捨てたるとはちげんはなせば奥よりも。新三郎こそ今川が。夫よ汝逃さぬと躍り出づれば茂太八も。お主の敵尋常に名乗つて勝負と飛びかゝるを。地兵藤彼處へ逃げ退きて。詞やれ侍共今川に疵ばし付けな生捕れと。地下下に隨ひむらくと取つてかゝれば。兩人は太刀打揮つて驅け寄るを淺香は長刀押取りのべ。眞中に押隔たり聊爾をせまい早まるな。渡せなければ渡しもせう討ちたくば又討たしめせん。

地方々最期の慰みにいで一曲を進めんとて。牀几にふはと腰をかけ急がず騒がず悠々と。長物語をはじめける。詞鳥に比翼の翼あり。松に連理の枝交す。況してや人の身の上に妹背の間は吉野河。江戸フシ地浅からざりし。年月の千代に八千代の玉棒。變らぬ色を頼みつゝハツミかけし情もフシ徒らに。秋ならねども散る紅葉。血汐に染めし俤は夢か。現か。現とも夢とも更に分きかねてフシ暫し。呆れ居たりしが。地詞實に今思ひ出した。首に五つの見様あり。右眼左眼天眼地眼佛眼とて。智者聖人は身を悟り浮世に心殘らねば。笑ふが如き顔を。フシ眠れる花に醫へたり。フシ色に。心を。繋かれて。首は切れども煩惱の。羈絆は切れぬ死顔は尻目遣ひが癖になる。男を怨むは左を明き。女を怨むは右を開く。飢えて死すれば地をまもり。怒つて死する其の時は。兩眼くわつと見開いて。フシそらを睨んで亡ぶとかや。詞今川程の武士が。人手にかゝる無念さに。空見る筈をさもなくて。地に向ふのは怪しやと。地見れば耳せゝ鼻の穴。土の有るこそ不思議なれ。正しく臍首拾ひ首。證據をいざや見す可しと。かう鬢月代後髪。一度にぐつと引き抜けば。フシ腐つた西瓜の如くなり。地浅香堯爾と打笑ひ我が身の夫も女郎の。思はく様も息災で遅しと待つて居給はん。跡慕ひ行く旅衣二人手に手を取り交し。奴供せいづれもは緩りと是にござんせと敵の中をしやなくとフシおめず臆せず出て行けば。詞兵藤怒つて聲を揚げ。エ、附甲斐なき侍どもそれ搦めよと罵れば。茂太八はつたと睨み付け。ハ、しやら臭いうんざいめ等。定めて音にも聞きつらん。奴が曾祖父父は新田殿の御馬添。栗生篠塚畑渡。其の名も高き四天王。地扱茂太八は草履摺と申せども。先祖も栗名字もくり。眼球もくりなれば。蟲喰なしの力瘤丹波越する遣銭。シヤ何程のことあらん。さあ打立てや尤もと勇み。進みし勢ひは。如何なる天魔疫神も恐れつべうこそ 三重見えにけれ

浅香今川道行

へ流れては。妹背の山の。中を行く。流れの末の今川や。戀の深みに沈めども。外見許りは。フシ浅香の前。浮世渡りのたつぎともやつし憔悴れて出て給ふ。フシオクリ心のへ内こそ哀れなれ。只今當町を速かに進め奉るは紀州渚の郡加田淡島大明神様ののみ御供洗米燈明の勸めなり。抑淡島大明神様の由來を詳しく尋ね奉るに。忝くも天照皇大神宮様の第六番目の姫宮にて渡らせ給ふなり。姿と言ひ形と言ひあら美しやしをらしやつとりばつとりちよいくの濡者でござんすなり。御年十六歳の春の頃祝言日出度う住吉大明神様の。一の后に備はらせ給ふこと。フシ疑ひなし。フシあらいたはしや。神や佛の御身にさへ。五する三ねつと申して。八つの苦しみ候をこれを。煩き病と思召しかやの。オクリうつろふ舟に。綾の巻物神樂の太鼓を相添へ。三月三日と申すに堺七度の濱より。おし流されさせ。フシ給ふとかやフシ心の麻痺。わくせきと。絡め纏ひて藤の森。オクリ花むらさきの色外に世をや厭ひてさま變へて。本フシ身は墨染の仇櫻。枕の露に吳竹の。伏見も後に眞菰刈る淀野の。情人知らじ。ア、我とてもフシ遊女の。スエテ筆に言はせて書き盡す。露其の文月の七日の夜。君と交せし睦語の比翼連理の言の葉もかれふになる。天の川逢ふ夜逢はぬ夜。數へくるフシさだの瑞麟神寂びて。舟と魚荷と争闘も。都の手振削り掛け後は日出度う棹の歌。船歌憧る。我は捨小舟思ひ。二つに三津の濱。フシなにはにつけて。身を怨む。松蟲塚に音を比ぶ。左手は生駒葛城や。安部野に續く岸の松。歌住吉の橘の反つたは。怪氣からかも氣からかも。氣には怪氣をかけねども。怪氣からかも知らぬ人。十七で嫁入初めて髷小枕落した。落したるかや忘れたるかや。夜ざり寢よとの約束か。今の世の中フシ色になり。フシ人の心は。仇惚の濡手で掴み淡島様。長地諸人愛敬福徳神御信心ある娘御に御器量よしの生よしの。殿御を持つて諸白髪。よね様方は大盡が取り付き。吸ひ付く月の内一夜の暇も有らせじとの。御誓願にて候と口に。出次第言ひ次第間うつ。語りつ行く程に。女の旅路ぐどくと道歩行かず足掻の。間ちかき程とも思はえず遠里の小野にぞ著きたまふ。なんまみだぶつ。地今川可笑しさ堪へかね。詞コレ奴殿。意氣筋張らずとえいわいの。何ちや身兵を奴とは。

三衣さんいを著ちやくして居ゐるものを。地ち近頃きんこう鷹相やうさう千萬せんまんな。調てうそんなら蛸たこと言いひましょか。ヤイ。非修ひしゆ非學ひがくの女をんなよ。既に如來にょらいの金言きんごんにも阿彌陀あみだは錢程せんじやう光くわうると有あり。錢せんがなうては三人さんにんが鼻はなの下したが干あるが。何なんとひとつも言いうて見みや。南無釋迦如來なむしやくじやにょらい様さま阿彌陀あみだ様さま。地ち淺香せんかう傍はうより笑わら止とどまり又々いん短氣たんきが起おこつたな。何故なぜいとしげに言いひ込こめる。調てうハ、くく。何なんの實じつから申まをしましよ。つひに斯か様やうな辛つら苦くいめは。なされもつけぬお二人ふたりぢや。お心細こころやすうござらうと思おもへば涙なみだが溢こぼれます。私わがが泣ないたら皆様みなさまのおむづかろと存ぞんずる故ゆゑ。あらぬてんがう申まをします。地ち免めんにも角かくにも一刻いぱくも早はやう旦那だんなに逢あひたさに。人ひとの獨ひとり語ごさゝやくまで氣きを付つけて聴きく故ゆゑに。最前さいぜん新地しんちを通とほる時とき今川殿けいけんが二階にかいにぢやと。言いふ聲こゑを聞ききましてづか〜と驕おごけ上あり。今川けいけん様さまと呼よんだれば。調座頭てうざとうが舊ふる琶びやを差さ置おいて今川けいけん檢校けんぎやうはれに居ゐる。何なんの用ようぢやと咎とがめられ手持て不沙汰ふさたに逃にげまして。地ち後あとな新家しんけで尋たづねたりや。角力かくりき取との今川けいけんをフシ教しやくへましたと戯たふれも。地ち奉公ほうこう振びに夕日ゆふじつ影宿えいじやく取とるあだてもござらぬと。力ちからおとせば今川けいけんはなう氣遣きづひを爲な給たまふな。まあ半町はんぢやうか一町いちぢやうで我われが親里おやぢの氣散きさんじは。水風呂みづふうりよ焚たいて火爐こたつして旅たび草臥くたけも休やすませしまよ。奥様おくさまお出いでてと先立さきだててば茂太八もくたはち競きうてきほひ口くち。調てう天道てんたう様さま大目だいめ様さま。一蓮いん託生たくしやうにして下くだされませ。なんまみだんぶつくくく。念佛なみぶつと共に。三重さんじゆへ辿たどり行いく。フシ人目ひとめさへ。遠里とほり小野このの住居ぢゆうきよ。樞とぼも鎖さで出歩であけどとらるゝ物ものも内證ないしやうは。竹光たけあうらしい刀掛たなかけ。フシ是れ浪人なみのりの證しるしなり。地ち三人さんにんの人々ひとは彼處かしこに尋たづね來きたりつゝ。今川けいけん内うちへずつと入いり父様ちちさま私わたしぢや母様ははさまと。呼よべど答こたへるものもなし。淺香せんかう外そとより差視さしき。調てうハアお留守るすならよいわいの。地ち又明日またあしたでも來きませうと。呼よべば茂太八もくたはち不承顔ふじやうがん。調てう留守るすなら留守るすと先達さきだて飛脚ひきゃくに言いうてこしたがい。地ち武士ぶし主しゆでなうて無様なさまな。念佛なみぶつを棒ぼうに振ふらしたとフシ錫杖しやくじやうを投なげ付つくる。地ち今川けいけん打笑うちわらひ此方こなたのが尤もつともぢや。近所きんじよへがな行いかれたもの親子おやこの間に遠慮えんりよはない。這入はいつて休やすんで下くださんせ。調てうソレ〜。其それで落おち著ついた。地ち奥様おくさまおはひり遊あそばせと。オクリ連つれたちへ内うちに入いりにけり。地ち今川けいけんはは亭主ていしゆ顔下がした差躰さしかうべて釜かまに水みづ。煎茶せんぢやは何處どこに在あることと障子しやうじを開ひらけてコレハ〜。調てう母様ははさま爰こゝに寢ふてござる。地ち深夜しやんや夜業やごふでも遊あそばしたか申まをし〜と起おきども。揺ゆり動うごかせど答こたへなし彼いれせたる衣きを引ひきま

くれば。襟に滴る血の雫悲しや母様死んでちやと。驚く聲に主従も立ち寄り見れば此は如何に。自害と見えて咽吭を二三寸ほど切り割いて。消えて間の有る魂は起回る可きやうもなし。周圍を見れど遺書も死骸に抱き附き今川は聲を揚げ。扱淺ましのお姿や死ぬる程なるせつなさは。我が身計りと思ひしにお前は何をかく計り。浮世の中を見限りてスエテ空しく成らせ給ふぞや。地持病に倍氣は有りながらお年老られて左様なる。はてな最期は爲されまじ。貧しき上に我が子をば預けし故に物事が足らはぬからのあらましか。度々毎のお文にも孫が顔見りや一入にゆかしい戀し懷かしと。繰言計り遊ばせしが今日来る私を待ちかねて。何故なう死んで下さんした。母様顔を見せに來た。唯一言物言うてお目をも明けて給はれと。フシ恨み。かこつぞ。せつなけれ。地淺香も共に涙含み別れは同じ道ながら。非業の様に思はれて残り多さも一入に。フシ心の内のおいとしや。オ、理や道理やと抱き擁へて撫て擦り。慰めかねつ諸共に傍も離れず凝視れば。死骸の上に打覆ふ小袖に付きし紋所。抱澤瀉に二つ引はつと計りに驚きしが。さあらぬ體にもてなし。詞覺悟の上とは言ひながらわらむるびれもせぬ顔は。男に勝るいさぎよき昔は如何なる人やらん。奥ゆかしやと尋ねれば。地今川涙の際よりも憂きも辛さも同じ身に。何にかは隠し申すべき。詞父は近藤某とて。仙洞の上北面母は高貴なる藤原の縁はあれど埋木の。お愧かしく候なり。ム、成程々々さもあらば。藤原氏も近藤も常紋はみな藤の丸。それにあれなる小袖には變つた紋が見えます。由緒はしさふらふか。如何様見馴れぬ紋所殊更今の身の上には。結構過ぎた春小袖誰ぞやつたか知りませぬ。詞オ、知らしやれぬ管のこと。抱澤瀉は自らが親久國の家紋。二つ引は足利の御所の御紋を拜領し。二つを一つに取り合はす此紋所を著る者は。久國ならで外にはない。其の着る物が有るからは親御は惡に一味の人。茂太八必ず油斷をすな。敵の住家につかりと足は留めて居られぬと。身拵へして立ち行くを今川袂に纏り付き。詞留めはしませぬ遣りましよが。何故私も參れとお詞はかけられぬ。ム其方に如才はなけれども。地大惡人の娘をば。地伴侶にはならぬと振り放せば。颯と向うに立ち塞がり奥様何うし

たお詞ぢや。詞お前と私と芥子程も重い輕いはいない身ぢやに。惡人呼ばはり遊ばすな。淺香詞に針を持ち。今川其れは慮外で有らう。君傾城に成り下り性根の腐つた其方と。地曇らぬ武士の女房と一つ口に言はれうか。今川はつと差俯き。エ、口惜しい無益しい。何故に浮川竹の勤めの身とは成つたるぞ。父は惡人母様には思ひもよらず死に別れ。二世とかけたる我が夫を尋ね逢ふべきしるべさへ。なき身の果ての淺ましやと。彼處へどうど臥し轉び、フシ消えかへりてぞ泣きにける。地淺香も哀れ催せど。心弱くて叶はじと。見知らね態に立ち出づれば又起き上り手を上げて。奥様待つて下さんせ。詞性根の腐らぬ證據には親をば討つて見せましよと。地叫べば癡で騙け戻り。詞今よう合點が行きましたか。其の返答が聞きたさに故と詞は荒せしぞや。見遁しにもと言ひたいが工みの程が覺束ない。地お家の大事になる時は臣下の道が立たぬ故。此方が斬らにや主従が手にかけて討ちますぞや。詞御念に及ばぬさりながら。惡事の品も知れぬ内逸まつて下さんすな。必ずうちや。地斬りますと。互に詞固め合ふ心悶々茂太八も。杖に仕込みし槍提げ。二人隠るゝ障子の内。オクリ外も生死のフシ親子の縁。今逢うて今別るゝと知らてや歸る平次兵衛。久振りでも見わすれず。詞娘か扱も能う來たな。詞お伴侶は何處に御座なさるゝ。イエ／＼伴侶はござんせぬ。詞ハレ脇宿がななされたもの。三人などは寝らるゝに。ハア異な事を言はしやんす。何の伴侶をば誘ひましよ。ホ、そんならば先づ其の通り。母が其方に寝て居るわ。障子を開けて逢うて來い。イヤマア緩りと逢ひませう。何故又障子が明けとむない。それでも後に逢ひたいもの。ム、わりや母に逢うたであらうがな。アイ最前に逢ひました。然うであう。こりや娘。お主は父が可愛か。但しは母が最愛いか。異つた事を問はしやんす孰れに愚かはござんせぬ。イヤ／＼。父と母とは善と惡。心に雲泥違ひが有る。孰れに従ふ言うて見い。地今川すつと差寄つて。定めしお前が善で有る。イヤヤサ身共は悪人。預り置いた茶々丸も久國殿へ遣はした。地お主も連れて參らうと御契約致いたが。應とは言はぬ容貌ぢや。例へば縛り絡けても渡さにや分が立てられぬと。徐々立つて後なる。早繩取れば今川も。かけたる刀

脇挟み。詞コレ父様。お年が老ればそれ程に。地心が僻む物かいの惡事に一味なさるゝを。意見しかねて母様は御目害をこそなされた物。それにも直らぬ此方様に無益な諫めは言ひますまい。私には夫が御座るぞや。詞伊勢新三郎長氏とて武士の女房でござんする。地搦めだてなぞなされたら親とは言はさぬ斬りますぞや。詞ハ、義理ばつて面白い。親を殺すは夫へ義理。子を搦めるは武士の義理。汝縛つて連れて行く。寄らしやつたら切りますぞや。縛るぞ。地切るが。縛るぞとフシぐるり／＼と付き廻れば。地今川堪へず抜く太刀を其の儘捻ぢ取り踏み倒し。危く見えし後より障子越なる槍刀。兩の脇つぽ刺し通されうんと計りに反りかへる。今川見る目もいぶせて。詞父様怨みて下さんすな。胸の中なる惡心が其の身を責むると諦めて。地潔く死なしやんせ天の罰とは言ひながら。餘り無慙の姿やと。スエテ裾に喰ひ付き。縋り付き。フシ悶え歎くぞ哀なる。詞平次兵衛打笑ひ。娘愚かな事を言ふ。障子の内に兩人を隠せしことは最前より。平次兵衛が知つて居る。男へ立つる義理の太刀首差伸べる筈なれど。親を討つたる天罰が報はん事の悲しさに。待ち設けたる他人の槍。何程嬉しい満足な。お家の大事をお主等に知らせたく思へども。互に言ふ言はじとて固め合うたる平次兵衛。地眼の明いて在る中は中々人には語らぬぞ。ア、槍先が鈍いやら膽に中らで死に難い。兩人の衆遠慮はないまそつと決つて決つて。望むに任せ左右より胸先かけて突き返せば。流れて落つる紅葉河。下は血に泣く涙川。親は泣かねど今川はわつと計りに。泣き叫ぶ。詞ヤレろ／＼と囁しい。嬉しや最期が近づいたか人顔がもう見え難い。佛へ懺悔の獨言必ず傍で聞くまいぞ。某武士の其の昔慰みにせし緒の道が。今は渡世の種となり。自然と上手の名も高く久國殿へ召し出され。お成座敷の繪を描きしに。狩野雪舟にも劣らぬと御褒美の上宣ふは。何と昔の名人は馬を描けば草を喰ひ。猫を寫せば啼いたと云ふ。其方坏が筆先にも奇妙があるかと尋ねられ。地鳥潛がましくは候へども皆一心の所爲なれば。有るまい物でも候はずと御返答申しに。近くへ寄れと招き寄せ。詞久國出世の望み有り。無間の鐘を其方が心を籠めて寫してくれ。本懐を達したら褒美は望みに任すとある。此の身

は老木の事なれば何の願ひも候はぬが。地たゞ一人の男子の孫お取立に與らば。兎も角もと答ふれば。幸ひく久國が養子分に致さうと。證據の爲の墨附は。此の帶の中に有る。詞其の上當座の要用とて金五十兩頂戴し。直に都を旅立ちて佐夜の中山分け入りしを。怪しき者と搦められ既に御前へ召し出され。今川殿の御意見は胸に徹て忘れねど。地武士の約諾極めし上鐘の形は見て戻る。三日が内斷食して頭の水を取り墨に混ぜ。一念の筆端に孫が出世を祈願して。思ひの儘に描き寫し平次兵衛は悦べど。女房は取り敢へず。詞其の身くの貧福は神佛の力にさへ。叶はぬと聞く物を其の上應ぜぬ幸ひは。子孫のかるゝはしとかや娘が方へも言ひ遣りて。談合づくが宜からうと意見するのも聞入れず。久國方へ傳へしに今朝自身來られて。向後一家の證とて御紋の時服をくれられて。孫も受取り繪も受取り歸られて半道も。はや行かれんと思ふころ家來に申し越さるゝは。貴殿の娘今川こと淺香と言へる女房と。茂太八と言ふ奴めと今晚か明晩は其の邊へまゐるべし。屹度搦めて出せと有る。何とも合點行かざる故使の奴を縛りあげ。大竹持て打ち撲けばあら勿體なや恐ろしや。孫茶々丸を隠庇ひ置き大將の子と偽つて。權威を附けて後々は國を奪はん工みとの。白狀を聞くよりも南無三寶欺された。取り戻さんと驅け出でしが多勢の者に取圍かれ。地犬死しては誰有つて訴へ報らす者なしと。宿へ歸れば女房は咽の邊を切り割いて。臨終の體に見えたるが某が手を探つて。詞言うて回らぬ事なれど。龜相なことを遊ばした。近藤平次兵衛こそ反逆人の一味よと。世間の人に誦はれては先祖末代萬々年。家名の廢る悲しさに。否々今度の惡心は。女房の所爲ちやと言はれん爲。私や自害して死にますと。言はれた時の愧かしさ。娘推量してくれい。地浮世に心は残らねど今日來る娘に逢ひたいと。言うた計りて程もなうがつたりと落ち入つた。詞母は世界の大善人。世に在る限りは回向せい。平次兵衛は無道者。云ひ出しもすな泣きもすな。親孝行と思ふなら茶々丸を取り戻し。反逆人の惡名を何卒雪いてくれたらば。地千僧萬僧供養より。フシ草の蔭にて悦ばう。地懺悔と言ふは是れ計り南無阿彌陀佛と。言ふかと思へば息絶えてフシ彼處へかつばと臥しにけり。地今川餘り堪へかねて。共に

第 四

死なんと泣き狂ふを。前と後に取り付いて呵つても見つ泣いても見つ。漸う諫め立ち出づる行くは三人留まるは二人連なる冥途の旅。又逢坂の關ならで。遠里小野油賣戀せぬ人は嬉しさも。物の哀れも知るまじと皆人。語り傳へける。

斯くて其の後 地日向の前司久國は己が心の曲りたる。怨の釣針四海に下し餌に頼りし近藤が。孫茶々丸を賺し取り大將の子と偽つて。新たに殿を構へつゝ諸大名へ觸れ流せば。御祝儀の獻上物緞子奉物東京錦。宛然寶の山こかし終には天下をひんまろめ。懷にせん下工み。フシ逆意の程こそ恐ろしけれ。地然るに若君御不例にて次第に重らせ給ふに付き。典藥衆は枕をわり針立按摩も時ならぬ。手に汗握る計りなり。地爰に名譽の梓神子生國は伊勢國。二見の浦の者なるが此のごろ京都に入り込んで。歌をひかして占ふに一代の善惡を。神の如しと言ひ囁す久國大きに悦んで。急いて參れと呼びづかひフシ櫛の齒を引く如くなり。詭神慮種とこそなれ歌占の。彈くも白木の。手束弓。フシ矢竹心か。今川が。面を人に知られじと。髪おつさばき立烏帽子後に梓小短冊。長絹の袖掻き合はせ。さも悠々と若君のフシ御前。近くおし直る。ワキ地久國詞殿懇に。調早速入來満足せり。疑ふにはあらねども歌を引いて占ふこと。昔も例候か粗物語いたされい。シテ遙夫れ歌は天地開けし初めより。陰陽の二神天の衢に邂逅の。小夜の手枕結び定めし。世を學び國を起して。今も道有る妙文たり占とはせ給へや歌フシ占問はせ給へや。詞何れにても候へ。手に當らうずる短冊を引いて御覽候へワキオ、尤も。若君の名代に久國が引いて見よ。そのはらや伏屋におふる帚木の。有りとは見えて逢はぬ君かな。如何有らうの。シテハア顔さへ知らぬお袋に逢ひたい見たいのお心が。積りくゝて大切な頼ひに成りました。ワキさう占うた心は如何に。シテ地ハテそのはらとは母の事。伏屋におふる帚木とは。賤しき喻へに候へば若君様は判然と。げしやく腹でござんしょう。詞ワキサツテモ神子殿名人ぢや。成程々々若君は大

將軍の折節に。ちよつちよとお手をかけられしお湯殿が産みおとし。母は亡くなり祖父祖母の手に養はれ坐せしを。久國不慮に尋ね出し御親子の對面も。地近日なざるゝ筈なれば御大切なるお身の上で。御病體は先づ知れた御理運の儀を占はれ。成程其の儀も知れますが。尋ねる人の心底に曲りが有るで合ひますまい。ワキハテ久國は曲りはせぬ。シテイ曲らぬとは申されまい。地そのはらや伏屋におふる常木の。有りとは見えて逢はぬ君かなとは仰しやれぬか。ワキ詞ソレガなんと。シテさればいな。お袋は息災でおまめで無事で。地有るとは見えてござんする。されども人目を忍ぶ故物をも言はず名乗りもせぬ。辛い心の限りをば逢はぬ君かなと詠むからは。歌が實でござんする。ワキ詞神子殿考へ違ひて有らう。シテ地魚相な事は言ひませぬ。ワキ詞スリヤ占ひは赤下手ぢや。シテア、下手か上手かは知らねども。母有る證據を見せましょと。する／＼と走り寄り茶々丸を取つて伏せ。懷刀さし付くれれば。ワキ詞久國大きに驚きて。ア、待つてくれ早まるな。扱は儕は今川よな。狼藉したら討殺すぞ。シテ愚かにござる久國殿。親の遺言守らん爲。威勢強きお座敷へ女の獨り來るからは。討殺さるゝは覺悟の前。地此の子を冥土へ伴立てば私は本望さりながら。此方の工んだ惡心が世間へはつと知れたらば。御一分が立ちますまい料簡をして此の若を。竊かにお戻し有る時は私も沙汰せずお前にも。お名の立つ義は有るまいが。二つに一つの返答とフシ死ぬるを恐れぬきつ相に。ワキ地久國ほうど持て餘し態と詞を和けて。詞天晴武士の娘ぢやな。詞オ、出來したよ潔い。ことに依つたら其方が望みを叶へて取らさうが。久國が願ひをば其方同心してくるゝか。地子をだに戻して下されば何でも異議は言ひますまい。ワキ詞さして異つた事でもない。それに掛けたる繪を見たか。是れぞ則ち汝が親。平次兵衛が一心を。筆に籠めたる無間の鐘。奇妙不思議も有る可しと廣言はいいたれど。何ぼう撞いても音を出さぬ。天鼓が鼓の例も有り其方立寄り撞いて見よ音をさへ出さば怪をば案内なしに伴れて行け。シテ何と仰有る久國殿。地未來の罪も恐ろしき無間の鐘を私に。詞ワキ鐘かねば汝討殺すが。シテ鳴つたら此の子を戻しやるの。ワキ遅いと一所に免さぬが。謔シテ縦

へ罪には沈むとも。く。又は罪にも沈まずとも。浮きながら我が子の代りに。調久國殿撞きますぞや。ワキサア撞け。シテ地今川途方涙ぐみ昔が今に至るまで。繪に寫したる鐘が音を出す例なけれども。孫可愛いと思召す其の魂は彩色の。中に隠れて見給はん今一念の無間の鐘。鳴らねば現在親と子が命を果す鐘の中。未來は擬措き現在に在地獄へ墮つとも。親への孝行子の命。助くる爲の一聲を聞かせて給へ父様と。スエテ袂のしたに手を合はせ。誦薄氷を踏む心地にて。心も危き此の鐘を。撞けば不思議や其の聲の心耳を澄ます聲出て。フシ實にも親子の證のこゑ。地サア其の子をば請取ると寄らんとするを。ワキ引抱かへ。撞木の繩にて咽喉をぐるぐる巻いて締め付ければ。シテ今川は泣き叫び。扱は久國欺したな。ワキ詞ヲ欺すとは推參な。智謀計略常の事。諸願の鐘に音を出せば我が本懷は達した物。地汝は後日の邪魔になる觀念せよとて締めつけられ。シテ地眼を見つめ身を震はし。いとたへげなる聲。音にてエ、口惜しい腹立ちや汝三日と立たせじと。言ふ聲計り命の綱彼處へかつばと投げ付ければ。コハリあらく不思議や一念の。火の玉體を飛び出でて。怨むが如く。地久國をぐるぐる追ひ廻りフシ後の長押に。地當ると見えしが忽ちに怒れる形を現はし。コハリ眼は電光石火の如く叫べる聲は雷霆の轟。々と踏み鳴らし。高塀練塀飛び越え。く行方も知らずへ失せにける。シテワキ二人よき光ぞと影頼む。世の光ぞと。鉢叩頼む茶の經は佛のキヨヒヨン。御寺立舟キヨヒヨン。會津の里きよに陸奥國有キヨヒヨン。飄箏ふくべに緒を附けて。折々風の吹く時はヒヨヒヨフヒヨン。しほうじの鐘の寒きに有りせいぐくにかけて。後生を願はばなどか佛に。フシ成らざらん。シテ詞コレ新三郎。一番鶏が鳴いてから二三里程も歩んだに。見やれ破軍の劍先は南の方へ指して有る。今宵はいかう夜が長いなう。ワキさればくあの鳴る鐘が七つてござらう。シテ實に鐘の音がする。ア、合點の行かぬ。爰は遠州の鹽見坂。中山寺に鐘はないが。待ちやく。地の底で鳴るぞや。ワキ眞に地の底で鳴ります。イヤく合點行きました。あれは談義の鐘でござる。シテハ、く。たはけた事ばかり。地の底に談義が有るものか。ワキム、世間

を見ぬ者は知らぬのく。是れ。了海和尚は死にやつたぞや。何が談義好きな和郎では有る。三途川の婆達に法華を誂つて聞かすのぢやわいの。シテ是れは如何様さうも有る。何ぢや知らぬが滅相に大地がゆさく動くぞや。ワキ動きますく。是れはならぬく。桑原々々。ヤレ俊秀殿。何處ぞに二階のはつた山はござるまいか。世直しく桑原桑原。シテ靈魂は籠中の鳥の開くを待つて去るに同じ。消ゆる物は二度見えず。去る物は重ねて来らず。フシ俤も。フシ別れに。變る。鐘の聲。習ひ悲しきえんぶの道。申しく。ワキ詞ヤア誰やら呼ぶぞや。ア、悲しや幽霊じや幽霊ぢや。シテ詞ハレ爰な和郎わいの。假にも法衣を著する身が幽霊でも化物でも。懼い事が何が有る。ワキオ、然うぢや。空也上人の流れを立つる。茶筌竈にまうしとは誰様ぢや。シテツミ歌誰とは愚か飽かずして。別るく今朝の道芝は。數より外の露涙。相の枕の鴛鴦に。二世と交せし言の葉の。フシ昔語に來りたり。ワキ詞相の枕とのたまふは。神子町の幽霊ぢやな。シテフシ紅の。涙に染むる戀衣。今墨染に引換へし。人の倂現と夢に。小オグリ交す契りはうき身の牀のうへに亂る。寢亂れ髪は下に解けずと。フシ人は知らずや。フシあさましや。二人あらくく風吹く。紅葉は顔にちり泥の積る思ひは曉の。鐘に残して谷風。山風そよ。くくそよき靡くや青柳の。絲に纏るく緑の袂。戀しさ募る淵瀬川。我は歸らぬ渡川。ありし勤めの其の内は。シテ歌月日かそへて何日か扱。地眞の名附けて我が内と。長地人に呼ばれて見まほしく二人が中に我が子ぞと寝させても見ぬ垂乳女が。迷ひの種の數々に。フシ人目包めば涙さへ。地我が物ならず我が物は。心計りともてなせど是れも外面へ出す事か。他所に見なして育てる小笹の露の五つ六つ。三世を契る妹と背のまるに一夜さ添ひ果てず。此の世からなる三瀬川。散れば芥の仇櫻。身の成る果ての悲しやと。フシ泣くより他の事ぞなき。ワキハ、く。怖い物の又大事なものの。逆縁ながら口説いて見ましょ。トウく其れなる幽もじに物問はう。冥土の旅にも新銀は四層倍に遣はるゝか。五文餅も大きい。二人ナウ五郎三郎田舎へお下りあらうずるには。瓢箪なりとも置いて行け。小瓢箪をなりとも置いて行け。それはや女郎安き間

の事なり。生國はや女郎てづくでん。づでんと闘うずるには。飄簾なうてはお笑止や。シテ語るに罪も消えぬべし。語るにつけて。フシ恐ろしや。江戸地罪を顯はす淨玻璃の。鏡に惡を寫せば。八萬奈落明らかに。悉く見得たり。劍錐地獄の苦しみはさも凄じき炎の中へ。眞逆に落つる事。フシ三羽の征矢より速かに。コハリ下より猛火を吹き上ぐれば咎は上より落つる所をさつ。くくく吹き上げて。隙なき苦患を送るなり。劍樹地獄の苦しみは鐵石をたつこと一由旬。劍を薙と植を列べ罪人の追廻し。岩石背に結び付けられて。地嶺よりどうど突き落さるれば骨は微塵に碎かれて。風に木の葉のフシ如くなり。フシ火盆地獄の。有様は頭に火焰を頂げば。百節の骨髓より焔々たる火を出す。コハリ或時は焦熱大焦熱の焔に咽び或時は。紅蓮大紅蓮の水に閉ぢられ。火槍あなうらを焼き足蹈はとうくと。地手の舞尺拍子打つ音は。窗の前の立ちつ居つ。苦しやフシ塙へ難や。我とは撞かぬ無間のかねごと。親の報いと敵の双と我が身一つを責めに責められ。修羅の太鼓は今日の身の上。仕舞ひ太鼓は昨日の今川。我が身の敵我が子の仇。久國討つて給はれと。言ふかと思へば妄執のフシ雲に形は消えてんげり。ワキはつと計りに新三郎空しき跡を詠めやり。やれ懐かしの我が妻や。身は飄簾の浮れつゝ。憂きが中にも逢ふことを待兼山の時鳥。巫山の神女雨となり。雲と聲えし古の夢ならずとも今一度。姿を見せよ聲聞かせよ。死出の山又三途の川。我を伴へ今川と前後をわすれ西東い彼方へ走り彼方へ行き。途方涙に伏し轉びフシ慕ひ。歎くぞ道理なれ。シテ詞俊秀諫めて聲張り上げ。ア狼狽へたか新三郎。何程泣いても悔んでも立ち歸る可き道もなき。此の世に心残さまじ迷ふが故に地獄有り。地獄れば其の身其の儘の胸に開くる蓮葉の。半ばを分けて待ち給へ。ワキ頓生菩提と伏し拜めば。シテ復現はるゝ今川が笑める容顏榮爾と。あら有り難や尊やな千歳交せし睦言も。かからん後は何かはと思ひ知られて歸めて。火宅を出づる法の印を是れ見給へと。言ふかと思へば佛はフシ旗の。文字に残りける。二人兩人はつと感涙の袖にも餘る心地して。急ぎ都に忍び行き敵を討つて手向けんと。急ぐは。ワキ心留まるは。名残の袂新三郎。消えにし空を詠めやり

二人よしや君唯。ア、寝ても覺めても忘るなよ。唯一念の念佛なりけり思へば浮世は夢の世ぞかし。榮華は是れ皆春の花。名利の心を振り捨てて。菩提の岸に至る可し。夫れ一代教主釋迦牟尼如來の説法には。華嚴あごんはうどう般若。法華涅槃法相律宗などと云へるこむづかしい事共我等が様なる愚智無智鈍なる衆生の爲には思ひも寄らず。彼方の門てはひよつひよひよすひよひよ。此方の門てはたん／＼からり。ころりと打ち鳴らして願ふ後世は茶筌召せ。茶筌召せ佛法あれば世法有り。煩惱有れば菩提有り。柳は緑花は紅の色々なれば。急いで浄土を願ふ可し。ワキ南無阿彌陀。シテはるひた。二人はつばいと茶筌。御佛本願力。もんめうよく往生界しつとうひこくじち。ふだいてん。實に西方極樂の。法の友又情の友。忠義の二字の友こそは現世も。後世も頼もしき

第五

地いで其の頃は文明二年孟夏の天。若葉秀づる花の御所日向の前司が推舉にて。茶々丸君と御親子の御對面有る可き旨。兼日仰せ出さるれば。地細川桃井畠山。仁木赤松吉良石堂。在京の諸大名残りなく相詰むる。地今川備中守俊秀。伊勢新三郎長氏は。お目通も遙かなるフシ大庭に伺候する。地兵藤目敏き男にて。詞ヤアそれなるは俊秀にてはあらざるか。御勘氣を蒙る身が何故御前へ出づる誰かある彼。引き出せと怒りける。細川詞おだやかにさな宣ひぞ榊井殿。全く彼等が私に罷り出でたるに候はず。此の座の大名残りなく料簡付けて上のこと。必ず鹿相遊はすなとおほやうに應待せば。大將御氣色損じつゝヤア何と言ふ勝元。諸大名が談合はせば如何なる無禮も頼兼が。料簡せんととの結構か。此は勿體なき御仰せ上を輕しめ候段。憚りなきには候はねど御家の一大事。事急に候條押して召し伴れ候と恐れ入つてぞ申しける。君領かせ給ひつゝ。家の大事を兩人が訴へんとの所存よな。語れ聞かんと御説有る。今川謹んで申すやう。承れば御養君御所へ御入り遊ばす由。御吉左右と申さうか御家の破滅と申さうか。御思慮有るべく存じ

候。もろこしの堯王は七人の實子を捨て。舜を位に即け給ふ例も數多候へば。地況んや御實子なきからは御養子の儀を俊秀奴が。貶し申すに有らねども。當年僅か五歳の若。發明にござらうやら。何ともならぬ頑童やら。行末見えぬ他人の子を親にも知らせずお館へ。召し入れられ候事。鹿忽の儀に候とフシ詞正しく相陳ぶる。地時に久國進み出で。調ア珍らしや俊秀。其の様になられても今にもがりを止めぬよな。コリヤ若君の御事はな。お袋の遺言にて某願ひ奉り。御實子に紛れがない。狼狽者と。言はせも政へず新三郎詞をかけ。イヤ異つた事を承る。二子は世間に多けれど一人の茶々丸が二人の腹から生まれうか。慥かに母の有る若を。それにも爭論ひ給ふかとフシ詰め掛け。詰め掛け罵りける。地久國怯む氣色なくこりや素浪人。調俊秀に頼まれて由ない事の命がけ。宜い首尾に歸らいでな。若君のお袋は鹿間殿とお館に奉公有りし女中ちやが。汝が方に母と言ふ女を爰へ伴れて出い。ハレとぼけた顔を致されな。後日の難儀を厭がつて其方が殺されし傾城の今川よ。地血を分けたるは新三郎親が名乗つて出るからは。外に證據の要るべきかと詞を荒らげ一命を。義に輕くする長氏が。フシ心の中こそ潔き。地樺井兵藤つゝと出て新三郎とは汝よな。調若君の詮議より先づ盜人の詮議しよう。日本の地に住みながら大將に敵をなし。惡黨どもを談合うて御城内へ忍び入り。御寵愛の傾城を奪ひ取るのみならず。家來栗原茂七奴が首をば能うも切つたな。地何卒捜し出さんと色々世話をやいたるに。己と罹る天の網彼奴めを縛れと喚はれば。俊秀は聲を上げ是れく。鹿忽し給ふな。調全く以て新三郎。城内へ入らぬ儀は某が證據人。栗原茂七と言ふ奴は討手と名乗つて某に。無體に切つて蒐りし故即座に討つて捨てたりしが。地貴殿は何の意趣有つて。御上意と偽つて俊秀討ちにおこされた。調イヤ虚言申されな。兵藤曾て覺えがない。某方如何なる所存にかお暇も乞ひ受けず本國へ下りし故。君も御勘氣なされしを笑止にこそは存じたれ。中々討手は遣はさぬ疑はしくは茂七めを。今爰へ引き出されい對決を仕らう。フ、其方は俊秀をいづな使にめさるゝか。地討つて捨てたる茂七めに物言はす儀は存ぜぬとフシ空嘯いて居たりける。調久國阿々と笑ひはあ地工

んだり。跡方もなき事どもを口に任せて言ひ散らし。證據に詰れば殺されたのいや此方が殺したと。死人に妄語
 といふやうな淺ましい義を持ち出して。御親子の御中を妨害せんとする俊秀が。心底心許なしと四邊をきつと睨め廻す。
 桃井腹を据ゑかねてつか／＼と立ち寄つて。膝下にどつかと坐り。詞コレ親父。貴殿の言分尤もぢや兩人いかに迂論
 者。何までもない若君のお袋を呼出せばざらりと濟む事さ。館へお入れなされたか但しお里に在るか。お迎ひに遣つ
 たが宜い。イヤサ桃井そなたは何と聞かれたぞ。鹿間殿には若君を産の上に死なされた。スリヤ只今は御座らぬか。
 ハテ五六年以前の事桃井ふつと吹き出し。やいたはけ者。今兩人が言ふ事をば死人の妄語ぢやなにとて。此の煩骨
 で嚇つたが何故若君の證據には。死人を立てゝ言ひ廻る。サア其の鹿間とやら言ふ女死なうが土になれうが。蘇生
 らせて伴れて来い。いやと言うたら兩人共首の骨を捻ぢ折ると。地言ひ詰められてうじ／＼とフシ尻ごみするぞ小氣
 味よき。地大將扇を上げ給ひ桃井必ず聊爾をすな。鹿間が事はうす／＼と心に覺えある女。證據は即ち頼兼と御蟲眞
 餘る御詞に。いきりきつたる桃井も。諸大名の顔見合ひ。フシ憫れ果てたる計りなり。地細川はつと手を打つて古人の
 詞に違ひはない。日月明らかならんとすれども浮雲是れを覆ふとは。大將の御身の上聰明敏智の背も。讒佞の雲覆
 ふ故理非善惡も悟れば。數百人の大名を久國兵。藤兩人に。思召しかへられぬ。地曲もなき大將に。忠勤勵んで何か
 せん。詞東海に舟を漕ぎ魯仲連が跡を追ひ。南山に歌謡うて寧戚を友とせん。地面々如何と言ひ捨てゝ座敷を出づれ
 ば諸大名。一度にはらりと立つ所に俊秀が女房淺香の前。奴茂太八驅け來り御前に畏まり。詞恐れながら御注進申し
 上げ候。趣は親久國老耄仕り。若君様とて差上げしは偽り事にて御座候。御吟味送げられ給はれとおとし付けて言
 ひ上ぐる。桃井は喜んでさあよい者が出来た若やいて来て面白。地是れも縁者の證據にて。糠切ににならうかと。
 フシ堅睡を吞んで聞き居たり。地大將暫時御思案有り親子の中に兩説有り。所存の程こそ心得ぬ但し慥かな證據はし。
 持參せしかと宣へば茂太八はつと罷り出て。久國方より近藤への養子證文頼狀。斯様々々の次第にて此の奴めが手

傾城無間鐘終

に入れて。ごはりまらすも短う。フシ恐れがましく差しあぐる。調大將啓き見給へば紛れもなき久國が直筆印形鮮明なり打驚かせ給ひつゝ。久國兵藤擲めよと御意。地待ちかねる桃井は蹴たふしく。踏み倒し天命知らずと引据うる。調大將かさねて御誕には。茶々丸知らぬ悪と云ひ一旦親子の約あれば。久國が所領をば残らず彼に宛て行ふ。地新三郎後見して先祖の家名を顯はすべし。大悪人の久國めもあさかが忠義の褒美して。命を助け追ひ拂へ。調兵藤め一人は不忠の者みせしめに梟木にさらすべし。地俊秀が金言を今こそ思ひ合はせしと。御機嫌の能き御笑顔。それが則ち君が世のフシ久しかる可き例ぞとフシ皆々悦び勇みつゝ國も太平。壽も。大平樂と治まりて賑ふ。春こそ目出度けれ

右之本遂吟覽頌句音節疊譜等不違毫釐令加註且以著述之全本令校合畢尤可爲正本也

豐竹上野少掾
作者 紀 海 音

大坂上久寶寺町三丁目

正本屋 西澤九左衛門 販

